

麦類の栽培管理

平成30年産麦は、生育初期の低温・乾燥の影響や、降雨による刈遅れ等により、収量は平年よりやや低収となりました。

品質は概ね平年並みの成績でした。麦の栽培基本技術を励行し、高品質・安定生産を目指しましょう。

排水溝の設置

収量低下の大きな要因として排水不良による湿害が挙げられます。この対策として、サブソイラによる弾丸暗渠の実施や排水溝を設置しましょう。

耕うん整地

碎土が悪いと出芽不良や除草剤の効果が劣り、薬害も受けやすくなります。

耕深は12〜15^{センチ}、碎土率（直径2^{センチ}以下の小土塊の重量割合）は60〜70%程度を目標とし、ロータリ等で耕うん整地しましょう。

また、多湿状態の土壤を耕うんすると碎土が粗くなり、出芽・苗立ちが不安定となります。土壤水分が多いときは、荒耕しを行い、土壤の乾燥を早め、乾いたら丁寧に碎土、整地を行いましょ。



は種期、は種量

は種が適期より早いと凍霜害や縞萎縮病の被害を受けやすくなり、遅過ぎると生育不足となり、収量の減少や品質低下を招きます。また、は種量が多過ぎると倒伏の発生や短穂化を引き起こします。「さとのそら」の「は種量」は10^{キログラム}あたり5〜7^{キログラム}を目安として、適期・適量は種に努めましょう。（表1参照）

表1 は種期・は種量（ドリル播）

麦種	品種名	は種期（月/日）	は種量（kg/10a）
小麦	さとのそら	11/10～25	5～7
	あやひかり		6～8
二条大麦	彩の星	11/5～20	6～8
六条大麦	すずかぜ	11/5～20	5～6

施肥

収量・品質を確保するためには、適正な施肥を行うことが必要です。麦の種類に応じて適正量を施用しましょう。（表2参照）また、土壤が酸性に傾いている場合は石灰質肥料を施用してpHを調整しましょう。特に大麦は酸性土壤に弱いので注意しましょう。また、地力が低い場合は、堆肥を施用するなど、土づくりや地力増進を図りましょう。

表2 基肥施肥量 けやき化成（14-14-14）の場合

麦の種類	品種名	施肥量（kg/10a）
小麦	さとのそら	60～70
	あやひかり	60～70
二条大麦	彩の星	50
六条大麦	すずかぜ	50

雑草防除

ほ場ごとに優占雑草や麦類の生育ステージを考慮して、は種後の土壌処理剤を確実に散布しましょう。（表3参照）

農薬を使用する際には、必ず使用農薬のラベルを確認し、周辺作物への飛散防止を徹底しましょう。

表3 麦類のは種後の除草剤（土壌処理剤）例

農薬名	使用量/10a	使用時期	使用回数	適用雑草
ゴーゴーサン細粒剤F	5～6kg	は種後出芽前（雑草発生前）	1回	1年生雑草
トレファノサイド乳剤	200～300mℓ	は種後出芽前（雑草発生前）	2回以内	※1年生雑草
リベレーターフロアブル	60～80mℓ	は種後～麦3葉期（雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで）	1回	1年生雑草
ボクサー	400～500mℓ	は種後～麦2葉期まで ○小麦の場合、麦4葉期まで（雑草発生前～雑草発始期）	2回以内	1年生雑草
ムギレンジャー乳剤	300～600mℓ	は種後出芽前（雑草発生前）	1回	1年生雑草
ロックス	100～200g	は種後～発芽前（雑草発生前～発始期）		1年生雑草

記載農薬は平成30年8月8日現在の登録状況に基づいています。希釈水量は農薬によって異なりますので、必ずラベルを確認して散布してください。※1年生雑草（ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く）